

精神障害者が地域で暮らせるための都市的条件についての研究

代表 岡本 和彦（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 助教）

〔研究報告要旨〕

精神疾患を原因とする精神障害者の早期回復には、不要なストレスを感じることなく日常生活を送ることができる環境が望ましいと言われている。精神障害者が安心して生活できる場所を提供するためには、支え合える仲間や地域住民がまわりを取り巻く環境づくりが必要であろう。

本研究では、日本の北海道にある精神障害者団体「浦河べてるの家」を中心に障害者の生活調査をし、日常行動や生活空間、地域に馴染んでいく過程を明らかにすることで、精神障害者が社会復帰しやすい環境について考察した。

第1章では、精神障害者の入院と社会復帰をめぐる社会背景と既往研究をまとめた。第2章では、精神障害者社会復帰施設の実態についてまとめ、社会復帰には何が求められているのかを明らかにした。第3章では「浦河べてるの家」を対象に、その概要と、他の社会復帰施設に対する特徴を述べた。第4章では、第3章で述べた特徴の理由を突き止めるために「浦河べてるの家」で詳細に行った調査の説明と、調査結果の分析を行った。追跡調査から精神障害者の地域での行動特性を明らかにした上で、ヒアリング調査からも「浦河べてるの家」が良好に機能している理由を明らかにした。第5章では、第4章で述べた要素をもとに、精神障害者が社会復帰しやすい環境のあり方について述べた。

結論として「浦河べてるの家」は、過疎の町にあった空き店舗を関連施設に利用したため、町中に関連施設が点在し、メンバーの居場所に選択の自由が生まれたことが良好な地域生活に結びついていると言えよう。これには主要施設となる団体本部と赤十字病院が海岸線に沿って線状に広がる町の両端に位置していることも影響している。メンバーはその双方を行き来する際に、関連施設のみならず、商店や図書館といった地域施設も自然と利用しているのである。

この知見を用いれば、都心においても病院や社会復帰施設の配置や生活プログラムの設定によって、精神障害者が無理なく使いこなすことができる社会復帰環境を形成することが可能ではないだろうか。